

「仙台ターミナルケアを考える会」設立30周年記念祝賀会 祝辞

本日は、「仙台ターミナルケアを考える会」設立30周年記念祝賀会にお招きいただきありがとうございます。前回25周年記念祝賀会にもお招きいただき祝辞を述べましたが、早いものでもう5年が経過しました。ネットでみますと、この間もこの会の主眼である、生と死のセミナー、会報の発行、出前講座、在宅医療の問題など継続して活発に活動していることを確認でき、改めてこの会に敬意を表します。これも会長の吉永先生をはじめとして会員の皆様の熱意の表れかと思えます。

ターミナルケアというと私はがんセンターで診療していましたので、がんの患者さんのことを思い浮かべますし、がんセンター在職中には、緩和ケア病棟に大変お世話になりました。

ここで少しがん医療について述べたいと思います。最近のがん医療における進歩は目覚ましく、手術、放射線、化学療法の各分野で進歩が見られます。手術では従来の開腹・開胸手術が減り、侵襲の少ない内視鏡下の手術が普通となりました。またダビンチなど手術支援ロボットの出現により、極めて侵襲の少ない精緻な手術が可能となり、入院日数が劇的に短縮しております。ちなみにがんセンター全科における平均在院日数は15日ほどとなっています。放射線治療では照射機器と技術の進歩、そして重粒子線や陽子線などの粒子線治療が普及、化学療法では副作用の多かった抗がん剤から分子標的薬が標準治療となり、最近では皆さんご存知のように免疫チェックポイント阻害剤による免疫治療が脚光を浴びています。もう一つ、がんのゲノム医療が始まろうとしています。がんは元々遺伝子の病気ですが、ヒトの遺伝情報を担うゲノムの異常を解

析する能力が格段と進歩しました。これによりがんの患者さんのゲノム異常を見つけることにより、各個人のがんに見合った使用薬剤を選択できるようになりつつあります。これががんのゲノム医療ですが、いずれ人工知能（エーアイ）とともに医療に貢献する時代となります。

このように確かに医療が進歩して、がんから解放される方々は増えてきましたが、不幸にして治療の甲斐なく終末期を迎える方々も決してゼロにはなりません。医学が進歩し治療が個別化するほど緩和ケアの重要性は増すものと思います。

誰もがいずれ死を迎えるわけですが、どのような場所で、誰に看取られ、安心して終末期を迎えるかは、いつの時代にも大切なことと思います。個別化した医療が進むほど、各個人の意向に沿った終末期を迎えられるよう意識しなくてはいけないと思います。こういった点で終末期のみならず生き方のヒントを与えていただける「仙台ターミナルケアを考える会」の活動はますます重要になってくると考えます。

この終末期を迎える方々のためにも、今後もどうかこの会の継続と更なる発展を期待します。私も微力ながら応援致します。

本日は設立30周年まことにおめでとうございました。

宮城県立病院機構

理事長 西條 茂